

平成二八年八月吉日初版作成

令和二年十二月吉日一部改訂

永遠の生命に気づき、

それを現わす

(一部改訂)

高嶋善三郎

目次

消えてゆくのはすべての苦悩	3
真実の自分を知る	3
闇が崩れてゆく姿を自分と同一視した	5
不幸等は守護霊守護神にコントロールされている	7
直観力を磨き、神性復活する	8
永遠の生命に気づき、それを現わす	10

(一部改訂の内容)平成二十八年十一月吉日に作成された内容について、論点を整理し、わかりやすく文章を一部修正・加筆しました。

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(スマホ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

消えしゆくのほろびの苦悩

この7月（平成28年）の富士道場で、「果因説による大成就の共磁場を創り上げる行事」が行われ、第二部で行われた「手放せていない過去と現在の想い、未来に抱く不安恐怖を自ら浄める行」は、大変印象に残るものでした。

この行事は、『富士聖地行事速報』によりますと、本来は消えてゆくゆく姿であるのに、私たちはまだ過去を掴み、手放していないもの、また、これさえなければ自分は神性で完璧なのに、とみなしている意識にスポットライトを当て、見つめ自ら浄めることにより私たちは一層強くなり、愛の人間になり、進化創造していくことを目的として行われました。

この行事では、果因説による大成就の共磁場にいる私たちは、その共磁場の光により、我即神也の我になっていたため、紙に書き込めた不安恐怖は浄められたといえます。

ここで、私たちが、認識すべきは、消えてゆくものは、潜在意識の中にだまっていた、自分の過去世から現在にいたる誤る想念、つまり神の御心から離れた想念、不安恐怖に象徴されるすべての苦悩であり、運命と現われた失敗などの体験記憶は、共磁場の光の中に還元されることにより、これからの愛と調和と美を現わしていくための智慧として輝き出すといわれているのです。

真実の自分を知る

それでは、不安、恐怖を手際よく浄めてゆくために、日頃どうしたらよいのでしょうか。

このためには、三つの真理を理解することでしょう。

まず第一に、自分の存在の意味を明確に知り、実感することでしょう。私たち人間はどこから来て、どこへ行くこうとしているのかを知ることです。

私たちは日々ご神事をやっています。これらのご神事は何のために行うのかということをはっきり理解することが必要なのだということです。それは我即神也の我をどれだけ実感できるのか。そのためには、自分の存在の意味を明確に理解することが必要なのです。

昔から、ソクラテスが「汝自身を知れ」とかデカルトが「我思うゆえに我あり」とか、有名な言葉が伝わっていますが、それらの言葉を聞いても、それは真理だと思うが、それがどうしたのか、また私たちが生きていくうえで、どういう智慧になるのか、明確には説明されていません。

昔の聖者賢者の言葉の中で、最もトントになるのが、釈尊の説法を記録した『般若心経』や、老子の言葉を記録した『道德経』ではないかと思えます。これも五井先生の解説により、はじめて理解で

なるものですが。

『般若心経』の文末に、「般若波羅蜜多の呪を説く。即ち呪を説いて曰く。羯諦(きゃてい)、羯諦(きゃてい)、波羅羯諦(はらきゃてい)、波羅僧羯諦(はらそうきゃてい)、菩提婆訶(ぼじそわか)般若心経」とありますが、五井先生は、「この言葉を「般若波羅蜜多の眞言を説く。明らかにせよ、眞理を明らかにせよ、さすれば、神界に昇れるのだよ。」と解説されています。

その眞理とは、端的に言えば、この肉体界は、神界(実在界)の現身(うつしみ)であり、顛倒(てんとう)(夢想)肉体世界は実在であり、すべてであるという幻想と錯覚(さくごう)を離れて、その眞理を明らかにしていけば(即ち自分の本体は神界にあるという自覚をもち、その視点からすべてを解釈して、生きてゆけば)この肉体を持ったまま自由自在心を得る、即ち大悟を開くことができ、すべて(死、病、老、苦など)に把われ(とらわれ)がなくなるというものでしょう。

また、五井先生著の『老子講義』14講では、「人を知る者は智なり。自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力あり。自ら勝つ者は強し。足ることを知る者は富めり。強いて行つ者は志有り。」(道德経第33章)があげられます。

五井先生の解説に従って、翻訳すると、次の通りになります。
人を知るのは頭で知る智でもできるが、想いを静め、心を深めて、じつと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと、眞実の自己、大生命

の分生命である自分というものを知らることができない。あらゆる業・想念・波動を超える程の強い意志力は、やはり明といわれる程の心境にならぬと現われぬことなのである。想念を常に物質世界の中に置かずに、神の中に生きついている人は、如何なる環境にいても、足ることを知る人であり、心富めるものである。何事にも全力を挙げてぶつかってゆける人こそ志有る者として、神は天命を成就させるのである。

自分とは何かに焦点をあわせて整理すると、次のようになります。
自分について、生命の本源の世界に繋がっている自分と、肉体・頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分、言い換えれば、眞実の自己と現われの自己がある。この二つの自己の区別を知ることとは、心を深めて、じつと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと出来ない。眞実の自己と現われの自己とが区別が出来るような心境を明(めい)という。眞実の自分を知りはじめると、すべての想念行為は正しくなり、自由になり、他人の言に左右されたり、地位や物質や情愛で動かされたりすることがなくなり、神のみ心のまま、本心そのままの行為ができるようになると言われています。

では、五井先生は、人間について、どのように解説されているのでしょうか。

人間は、親神様(宇宙神)につながっている直霊・分霊であり、それが、動きだし、幽界に行くと、魂になり、もっと粗い波動になると、魄要素となって肉体になっている。そして靈魂が肉体界で働くうちに、魂

魂要素に引きずられて、本来の自由を見失ってしまったところに、迷い(業)が生じて、現在の肉体人間となっている。

魂の方は肉体において種々の体験を経、霊界において分霊と合体し、ついに神そのものの直霊とも合一して、今度は守護神的働きをするようになるといわれているのです。

そして、ここで言われている肉体での体験とは、肉体界に神性を顕現する、即ち愛と調和と美をこの肉体界に現わすことと言われているのです。

では、どのように神性顕現しようとしているのかというと、五井先生は、「大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊と私は呼んでいる。この七つの直霊が各自のいのちを働かだし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそつした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍している。人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていく」と解説されています。

我即神也の我は、壮大なる使命を帯びた神の分霊(魂)であり、愛と調和と美の世界をこの肉体世界に現わそうとしている我であります。根本的要件は、生命の本源の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分、言い換えれば、真実の自己と現われの自己があるが、この二つの自己の区別ができる我だといえるのではないだろうか。

闇が崩れてゆく姿を自分と同一視した

第二に、不安、恐怖の本質を理解することでしょう。

特に、病気や不幸や貧乏に直面すると、どうなるんだろうかと、不安や恐怖になるものです。また、過去病気や不幸や貧乏を体験し、それらを思い出すたびに、不安恐怖になるかもしれません。

不安、恐怖の本質を理解するのに参考になるのが、五井先生の、般若心経に示されている顛倒(てんどう)「夢想等」についての説明です。

人間が神様(直霊)から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様(直霊)への想い(感謝)を疎んじ、五感六感に感ずるもの、他は無いと思つさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方であると。そしてこの思い方をしたため、業生、即ち神のみ心から離れた、誤てる想念が生じたのであると解説されています。

「誤てる想念(業生)は、人間が神様(直霊)から分かれ、霊

界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、五感六感に感ずるものの他は無いと思うさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方、顛倒（てんどう）した思い方をするようになったために生じたのです。（『新しい般若心経の解釈』14ページ）

また、顛倒（てんどう）夢想の思いの仕方になったいきさつとして、次のようにも、説明されています。霊・魂・魄として三界（霊界・幽界・肉体界）に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていったと言われています。

「この霊・魂・魄として三界（霊界・幽界・肉体界）に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていった。（『神と人

間』25ページ）」

さらには、業想念（誤てる想念）が生じた原因として、五井先生は、「分霊（魂）が、地上界の肉体身を纏っているため、本来は神の光の側にあるにもかかわらず、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまったことにより不安恐怖が生じた」と説明されています。

「この業というものは神がなくて現われたものではなく、間接的にはやはり神の力によって動かされているのであります。から、神がその必要を認めない時には、崩れ去るのであります。光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がない場合には、闇はそれ自身闇であることを自覚することはありませんが、ひとたび光がそこに放射され始めますと、光と闇との区別がはっきりついてまいります。そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけずつ、削り取られてゆく形になってきます。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とするのです。

ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上界的な性質をそれ自体が持っておりますので、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、未開発が開発されてゆく過程において、種々様々な動揺や変化が起こってまいります。

それを肉体人間が反対的に考え、かえって自身を闇の側に置

いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまったのであります。

この不安恐怖つまり神の光、霊性を離れた考え方が無明であるわけで、それが業想念の生まれた原因なのであります。(白光誌1958年5月号7ページ)「

そして、顛倒(てんどう)夢想の思いの仕方によって、誤てる想念(業生)は、あまりにたまりすぎると、自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れるのです。それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。この汚れが取れてゆくに従って、生命が輝いてゆくわけですが、この汚れが取れてゆく姿が、病気や不幸や貧乏となるのです。

「この誤てる想念(業生)は、あまりにたまりすぎると、自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れるのです。それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。この汚れが取れてゆくに従って、生命が輝いてゆくわけですが、この汚れが取れてゆく姿が、病気や不幸や貧乏となるのです。(白光誌1963年7月号9ページ)「

以上から、不安恐怖は、神の光としての自分が地球界の闇を進んでゆくとつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまい、神の御心から離れた想念を発し、それがたまりに

たまり、それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。この汚れが取れてゆくに従って、病気や不幸や貧乏などの運命となって消えてゆく姿になった。その姿が消えてゆき、生命が輝いてゆくものなのに、その姿に把われ、あらためて不安や恐怖の想念を発し、不安恐怖の想念の層を厚くしていたといえます。

不幸等は守護霊守護神にコントロールされる

第三に、不幸や病気や貧乏は、私たちを守護霊守護神のコントロールのもとに、現われてきていることを知ることでしょう。

自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れると、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが不幸や病気や貧乏などの姿となって、外部にだされてゆき、それに従い生命が輝いてゆくのですが、このような現象は、肉体だけが自分だと思いついでいる人間にとつて、とても耐えがたいことなのです。

これを乗り越えるには、守護霊、守護神の存在を知り、その援助を得る以外、手段はないといわれているのです。

それはこのような業想念の消えてゆく姿の現象は、この肉体を通して、愛と調和と美の世界を現わすという、守護霊守護神の計画のもと、コントロールされ、現わされているからです。

守護神守護神として働いている力が90%、肉体側の分霊と魂の力と

いうものは、わずか10%だといわれています。

私たちの目の前には、守護霊守護神がいろいろとやり繰りし、私たちが人間が受けるべきものの90%を身代わりに受け止め、残り10%のものを現わし、私たちの肉体想念を通して浄め、神我一体化を深めてくださっているのです。

ですから守護霊守護神に感謝して、任せる以外道はないのです。

そして、守護霊守護神との一体化が進むと、自分の願い事を守護霊守護神に伝えると、それに沿って実現されていきます。

また、自分以外の人の天命を祈るときも、自分の守護霊守護神を通して、相手の方の守護霊守護神に光を渡すイメージで行うのが大切です。相手方が具体的にどのような行動するかは、相手の守護霊守護神が手渡された光により対応されてゆくのですね。

そのためにも、私たちは、日頃から自分自身に光を十分降ろしておくことが重要になります。

「神（直霊）としては人間内部にいなながらも、真理をわからせようとして、自らが分かれて守護神ともなり守護霊を創って、外面的に人間に智慧を与え力を与え、業から守っているのです。」（白光誌1974年3月号8ページ）

「一人で生きていると想っているけど実はそうじゃない。神の生命そのままの直毘（なおび）から肉体の内面側と外面側にわかれたのです。内面側は肉体の中に分霊と魂として入り、一方の外面側には、大神様のはじめからの計画で守護霊と守護神に守らせることにしたのです。守護霊守護神として働いている力

が90%、肉体側の分霊と魂の力というものは、わずか10%なんです。（白光誌1964年5月号15ページ）」

直観力を磨き、神性復活する

以上三つの真理を知り、理解して認識すべきことは、私たちは、無限なる叡智や力を発揮できる素質をもった存在であることです。

以上から言えることは、不安恐怖なくしていくには、次のような対応により、肉体外の六官（直感）直覚（神智）即ち直観力を取り戻していくことです。直観力は、人間が神様（直霊）から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、私たちが顛倒夢想の思いの仕方になって失った、別の言葉でいえば、忘れてしまったものであることは、既にふれたとおりですが、それを復活させることが、私たちが全力で取り組むべき課題なのです。

（1）顛倒夢想の思いの仕方を改めることです。言葉を換えれば、本来の自分は、生命の本源の世界に繋がっている自分であり、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分ではないと確信し、真理の祈りや真の言葉によって、光そのものとなる即ち我即神也の我を取り戻すことです。

（2）不安恐怖の原因とを考えていた、病気や不幸や貧乏は、私たちの生命を輝かすために、守護の神霊によって私たちの耐えられる範囲で現われ、誤るる想念や思いの仕方が消されていると、即ち大難を小難にし

ていただいたと、守護の神霊に感謝していくことです。また現れたとしても、無限ではなく、必ず有限なもので、時とともに、なくなっていくと確信することです。

(3) 宇宙神の無限なる生命エネルギーを受けとめ、生命輝かに生きるために不可欠なチャクラについて、正しく理解し、体験することです。チャクラは、魂と精神と肉体を統一・調和する機能を果たし、また我々の神性、靈性を開くために大変必要な器官なのです。

チャクラの数は、宇宙子科学では、七つであり、このたびの新年祝賀祭(2010年)でひらかれたのは、上から二番目のチャクラである額のチャクラであり、「叡智のチャクラ」である。チャクラは常に神とつながっているべきものであるが、全身の七つのチャクラの中でも、額と頭頂部のチャクラは神とつながる大切なポイントであり、ここから光の一筋が降り来る(その他のチャクラは、内臓等の“見える器官”と密接に関わり、調和に導くチャクラである)。額の叡智チャクラが開き、かつまた怒りや悲しみと言った否定的想念が全く作用しなくなると、すべてのチャクラは自然と開いてくるのです。

宇宙神から一筋の光が私達のチャクラを通して降りてきていることを現実あるものとして意識することです。神我一体感は少しずつ増してくるのです。現実あるものにしていく一つの方法として第一チャクラから第七チャクラまで順番に意識(光の意識)を注ぎこみ、常に開いて、活性化しておくことです。私方には、この肉体にある七つのチャクラのほか十二のチャクラを通して宇宙神とつながっており、私たちの頭上の

0センチ位のところに第八チャクラ降りて来ているのだそうです。肉体にある七つのチャクラに光の意識を注ぐには、まず椅子に座り、あるいは正座して足が床から地球大霊王の中心までイメージで伸ばし、一番下のチャクラから一番上の七番目のチャクラまで一つひとつに深呼吸等をして光の意識を注ぎこんでいきます。そして第八チャクラに意識をおけば、宇宙神から降りて来ているチャクラにつながります。これを繰り返すと、光や高い波動を頭頂に感じるようになります。(『神意識を深める』9ページチャクラの活性化方法を参照)

(4) 私たちのスピリチュアルな能力、神聖な能力を開発する方法として、呼吸法もきわめて重要です。『白光誌2016年6月号』の「呼吸法の唱名を最大限に活用する」では、インスピレーションや直観力やビジョンなど、得るため「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」という唱名を、息を止める間に唱えながら行う呼吸法を挙げられ、息を吸い込む時に、目の奥の、頭の後ろのほうに意識を集中させることです。これをやると、目の奥の、後頭部の箇所から宇宙を見渡すことが出来るのです。この目を神の目と表現されています。

(5) 運命それ自身が今の自分ではなくて、今の自分は、神の中にあるということを知ることです。大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまったって、その流れに左右されているため、我即神也の我(真実の自分)を感じることができないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく姿なのです。ですから運命環境が悪

くても、それは今の自分が悪いからではない。この環境とは、自分の現在の姿、即ち才能、容姿や家族なども含まれています。環境、運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が現れて消えてゆく姿なのだ。そう確信し、今の自分は、神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命だと信じ続けると、生き死の恐怖不安に把握れなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得することができるのです。

「あれは運命だ、これも運命だ、という人がいます。大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまっただけで、その流れに左右されているようです。

ところが本当は、自分というものと運命というものは違うのです。運命というものは、前生を含んだ過去において作ったものが、今現れて消えてゆく姿だけのものなのです。

運命それ自身が今の自分ではないのです。たとえ運命がよからうと悪からうと、今の自分のもではないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく姿なのです。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。また運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が、現れて消えてゆく姿なのです。ですから運命や環境が悪いかから、といって今の自分を嘆き悲しみ、責め卑下することはありません。また運命環境がよいからといって、感謝こそすれ、自惚れ

たり威張ったりしてはいけません。それはみな消えて行く姿なので、です。

では今の自分はどこになるのか。今の自分は神の中にいるのです。神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命なのです。そして現れてくるものはすべて消えてゆく姿。この信仰に徹すると、生き死の恐怖不安に把握れなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できるのです。『如是我聞』73ページ187)

(6)直観力のうち、否定的観念、暗黒的想念の波動を見極める直観力をまず大いに養うことです。そのためには、まず、自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せくので、祈り、自らの想念を浄める。そして日頃の自らの想念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていくことです。

以上の対応により直観力が養われてくると、神の叡智をキャッチできるようになり、自らが放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべては完璧につまきいく。幸せで、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくれるのです。

永遠の生命に気づき、それを現わす

永遠の生命の世界は、永遠に生き続け、自他一体感(愛)の世界であり、光一元の世界であります。私たち人間は、元その世界の住人で、自らの神意識を深めることもに、この地球の次元上昇(アセンション)を成功させるために、この地上に降りて来ているのです。言い換えれば、この未開(闇)の地を愛一元の世界にするために降りて来ているのです。

神の光としての自分が何故、不安恐怖に襲われるかという点、既に整理したように、地球界の闇を進んでゆくとつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまい、神の御心から離れた想念を発し、それがたまりにたまった。そしてそれを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部に出され、この汚れが取れてゆくと従って、病気や不幸や貧乏などの運命となって、その姿が消えてゆき、生命が輝いてゆくものなのに、その姿に把われ、あらためて不安や恐怖の想念を発し、不安恐怖の想念の層を厚くしていったからです。この過程を通して私たちは、親神様につながる直観力を忘失してしまっただけです。

今このことに気づき、自らの直観力を復活させ、私たちの天命を完うしようとしているのです。

このように永遠の生命に気づくと、自分の身の周りに対して、観方や感じ方が大きく変わってきまします。

昌美先生によると、自らの目を通して神を見、また自らの耳を通して神の声を聞くことができ、自らの肉体もすべて整っていることが判るようになるのである。さらに、神とつながるチャクラが開くと、神のバイブレーションがあることが判るようになり、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになり、また音も味も、妙なる美しいものが感じられる。そして、自分たちだけが素晴らしいのではなく、すべての生きとし生けるものが全部つながっていることが実感できる。三次元世界にいながらにして、神界に生きられるようになるのです。

一瞬にしてすべてが神そのものとなってしまえば、神の心が自分の心として判り、神のなさしめることが自然に判るのである。聴こえてくるものは「絶対に大丈夫。すべてが光に包まれているし、人類の行方はすべて一つである」という神の言葉であり、そして自分もいつの間にか、自らの言葉を通して神の言葉を——人類が本当に行き着く美しい場所を、知らないうちに語っている。即ち神人たちは自分自身の姿を通して究極の真理を示すのである。「自分自身が完璧に神とつながって一光なのだ、すべては一つなのだ、すべては破壊されることなく、神様の中に包まれて生かされているのだ」ということを実感し、それぞれが神人としての輝かしい生き方を示すことによって、世の中が自然に変わってゆくのであると言われています。

私たちは、昌美先生のお言葉からすると、三次元世界にいながらにして、神界に生きられるようになったといえるのではないのでしょうか。